特集
〈事例〉

催し物を充実させて30周年記念行事を開催

公益社団法人
兵庫県シルバー人材センター協会
（兵庫県）

兵庫県ＳＣ協会は例年、10～11月に事業推進大会とシルバーフェスティバルを開催している。令和６年度は30周年記念事業と位置付けて、内容を充実させて実施した。事業推進大会では講演やミニコンサートを企画した。シルバーフェスティバルではシニアチアダンスチームなどのパフォーマンスで盛り上がるとともに、３センターによるワークショップも好評で、多くの来場者でにぎわった。

定例行事を拡充して周年イベントを企画

兵庫県ＳＣ協会（以下、協会）は、例年10月に事業推進大会を、11月に「シルバーフェスティバル」を開催している。令和６年度は、協会の設立30周年記念事業として、それぞれの行事の催し物を充実させて開催した。

行事の準備のため、令和６年４月に職員７人で構成する設立30周年記念事業推進チームを設置。主担当と副担当をそれぞれ１人ずつ決めて、チームで決めた方針に基づいて実務を遂行していった。チームを率いた担当職員は、「事業推進大会からシルバーフェスティバルまで２週間しかなかったので、準備が大変でした」と振り返る。

著名人の講演でより魅力的な内容に

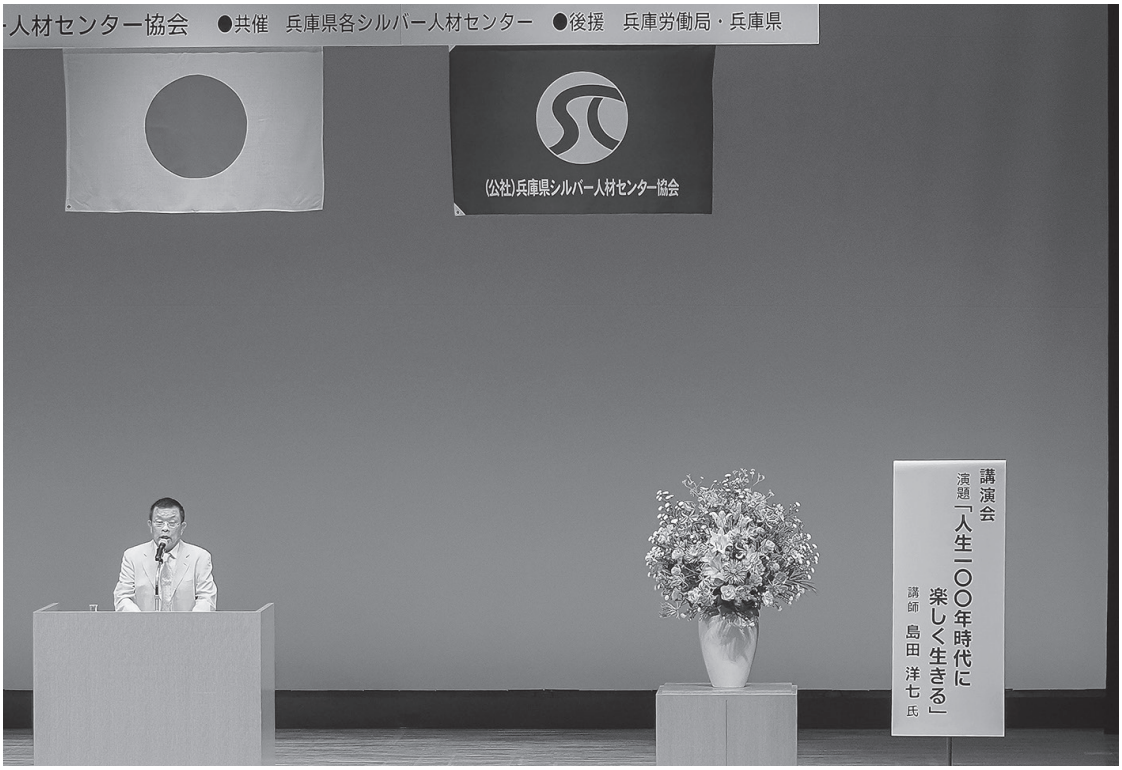
事業推進大会は、設立30周年記念大会と銘打って、令和６年10月31日13～16時、神戸情報文化ビル４階神戸新聞松方ホールで開催された。同大会には会員、一般市民合わせて４３０人が来場した。席が足りなくなることも想定して整理券を準備し、万全の体制で臨んだという。

前半は、長年にわたり地域社会に貢献してきた会員・役職員ならびに安全就業に尽力したセンターの表彰と安全宣言を行った。

後半は、記念大会ということで、漫才コンビＢ＆Ｂの島田洋七氏のトークショーが行われ、「人生１００年時代に楽しく生きる」をテーマに約１時間講演した。

「難しいことを考えずに生きればいいといった内容を、面白おかしく話してくれました。軽快なトークで、たびたび笑いが起こり、会場を大いに沸かせてくれました」と担当職員。

続いて、協会のイメージキャラクターを務める、演歌歌手の徳永ゆうき氏による30分間のトーク＆ミニコンサートが行われた。会場では駆け付けたファンが、ペンライトを持ってコンサートを盛り上げた。



事業推進大会では、漫才コンビＢ＆Ｂの島田洋七氏が「人生100年時代に楽しく生きる」をテーマに講演した

会員の手作り品の販売やワークショップでにぎわう

シルバーフェスティバルは、シルバー人材センター事業の積極的な周知と普及啓発を目的として開催している。令和６年度は、11月17日11時～15時30分、神戸ハーバーランドセンタービル地下１階にあるイベント会場「スペースシアター」で行われた。同会場は、屋内でありながら天井高約30ｍの解放感ある吹き抜けと２６５インチの大型ビジョンが特長のオープンスペースで、神戸有数のショッピング・観光エリアであるハーバーランドの玄関口にあるため、買い物客や観光客が多く往来する。

例年、このイベントは、兵庫県内のセンターによる物品販売、ステージでの催し物で構成される。

令和６年度も、８センター（神戸市ＳＣ、西宮市ＳＣ、芦屋市ＳＣ、伊丹市ＳＣ、小野市ＳＣ、加古郡広域ＳＣ、養父市ＳＣ、朝来市ＳＣ）がブースを構えて、会員の手作り品や農作物を販売した。加えて、一般社団法人あまがさき観光局と公益財団法人神戸市産業振興財団も出店し、特産品などを販売した。

当日は７時からステージの設営を始め、出演者が順次リハーサルを行った。11時からのオープニングアクトショーは、50～80代の女性によるシニア世代のチアダンスチーム「キャサリン・ラビット」が務めた。金髪のウィッグとつけまつげ、華やかな衣装で、ポンポンを持って踊る姿が、道行く人の目を楽しませた。

その後、オープニングセレモニーへと移り、岩田強会長が開会のあいさつをした。続いて、朝来市ＳＣの会員が、昭和歌謡に合わせて踊る健康体操「懐メロでちょいトレ」を披露し、観客も一緒になって楽しんだ。

11時45分からは「シルバーコレクション'24」と題するファッショ

シルバーフェスティバルの出店ブースでは、のぼりを掲げて会員の手作り品や農作物、特産品などを販売し、多くの客でにぎわった

ンショーが始まった。

ファッションショーは、「元気に活躍する会員の姿は同じ高齢者に元気を与える」という考えの下、会員等がモデルを務め、令和4年度の事業推進大会で初めて披露した。2回目も事業推進大会（令和5年度）で行い、来場者に一層楽しんでもらえるよう、会員のほかにプロのタップダンサーをモデルとして起用し、タップダンスを披露してもらうなどの工夫をした。

3回目はシルバーフェスティバルでの開催となったが、担当職員は「多くの来場者に楽しんでもらいたいと考え、より〝お祭り〟の要素が強いシルバーフェスティバルで行うことにしました」とその意図を語る。

モデルは、県内外で活動しているダンサーなど個人・団体10組20人。協会が主催するメークやウオーキングといった講座の講師を通じて出演を依頼した。ショーでは、「ジェンダー・イクオリティ」（男女の平等性）をテーマに、ファッションを披露しながら、ダンスや歌などのパフォーマンスでも会場を盛り上げた。

12時30分からは、ひょうごSDGsネットワークによる「SDGs紙芝居」が始まった。大勢の人が見られるよう、紙芝居は会場の大型ビジョンにも映し出した。第1弾は昔話「桃太郎」をベースにしたもので、捨てられた食品を桃太郎が調理すると、鬼が「おいしい！」と大喜びするというストーリーで、食べ物の大切さを訴えた。途中、事業推進大会にも出演した徳永氏による30分間の演歌のミニコンサートなどを挟んで、14時からSDGs紙芝居の第2弾がスタート。来場した子どもたちを対象にしたSDGs関連のクイズも好評だった。

14時30分からは、養父市SCの会員と徳永氏がステージに上がり、養父市が発案したご当地健康体操「やぶからぼうたいそう」を実演。最後に徳永氏が2度目となる30分間のミニコンサートを行い、幕を閉じた。

令和6年度はシルバーフェスティバル初の試みとして、観覧エリアの横にイベントブースを設けて、ワークショップを開催した。明石市SCは石に絵を描くストーンアート、芦屋市SCは風船を使って動物などの形を作るバルーンアート、伊丹市SCはモールで作るふわふわのモールドールと、それぞれのセンターが独自の企画で来場者を楽しませた。

担当職員は「令和5年度のシルバーフェスティバルには子どもも多く来場したので、令和6年度は子どもが楽しめるコーナーを設けたいと考えました」と話す。

ワークショップで必要な材料は協会が準備し、各センターの会員等が講師を務めた。担当職員は「子どもが参加してくれるかどうか心配でしたが、整理券を配らなけれ

ばならないほど盛況でした。講師を務めた会員も、休む暇がないとうれしい悲鳴を上げていました」と振り返る。特に、モールドールは女子高生の間でも流行しているとあって人気が高く、用意していた30人分の材料はすぐになくなったという。

神戸マラソンと同日開催で大勢の来場を見込む

スペースシアターでシルバーフェスティバルを行ったのは、令和5年度に続いて2度目となる。令和5年度は「神戸マラソン2023」の開催日と重なり、マラソンの応援・観戦に来た人たちが立ち寄ってくれたおかげで、大いににぎわった。

令和6年度も「神戸マラソン2024」と同日に開催したが、兵庫県知事選の日と重なったこともあってか、「期待していたほど来場者は多くなかった」という。ただ、オープニングのキャサリン・ラビットのパフォーマンスで人の流れができ、「いいPRになった」と担当職員は手応えを感じている。

各センターからの参加者は多く、朝来市SCからは約30人が駆け付け、養父市SCはバス2台で来場した。

想定外だったのは、野菜の出品が少なかったことだ。「例年、ブースでは野菜がよく売れますが、令和6年は出展するセンターが少なかったことに加え、会員の高齢化や猛暑による農作物の生育不良といった影響があるのだと思います」と担当職員は分析する。

また、ステージと控室が離れており、ファッションショーに2回出るはずだった出演者が、1回目の出演後に控室に戻ってメーク直しをしたところ、2回目のステージに間に合わなかったというハプニングもあったそうだ。

令和7年度もシルバーフェスティバルを開催する予定だが、「反省を生かして、次回はより良いイベントにしたい」と協会では考えている。「初めて取り組んだワークショップは当初開催を懸念する声もありましたが、多くの人に来場してもらえ、新しい発想で取り組むことの大切さを実感しました。失敗するか成功するかは、やってみないと分かりません。来年度も新しいことにチャレンジしたいと思います」と担当職員は語った。

（井本旬子）

50～80代の女性によるチアダンスチーム「キャサリン・ラビット」は、シルバーフェスティバルのオープニングで多くの人の注目を浴びた

ファッションショーでは兵庫県内外で活動するアーティストがパフォーマンスを披露して、イベントを盛り上げた

伊丹市SCによるモールドールのワークショップは、整理券を配るほど盛況で、30人分の材料がすぐになくなった